

12 学級モラルの形成

いくら学習に有効な手立てであっても、個別的な対応を嫌がり受け入れたがらない児童生徒がいます。それは、自分だけ「特別扱い」されるという思いがそうさせるのです。

個人差への配慮が学級に自然なことで受け入れられるには、①日頃からお互いの個性を認め合う風土が培われており、②児童生徒が「価値の多様さ」に気づけることが不可欠になります。

1 共生の心と絆の育成

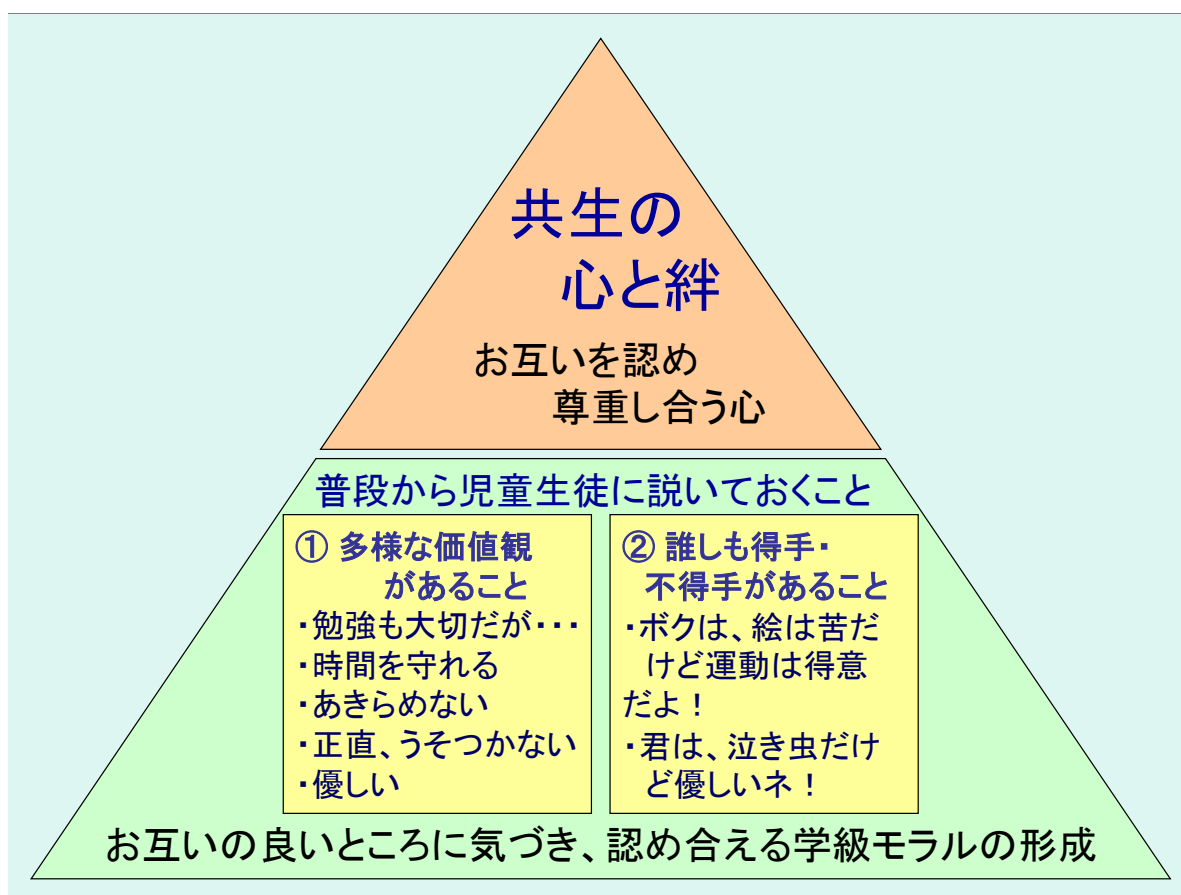


図 12-1 「共生の心と絆の育成」

<ユニバーサルデザインの視点>

「①全ての児童生徒が参加できる授業」

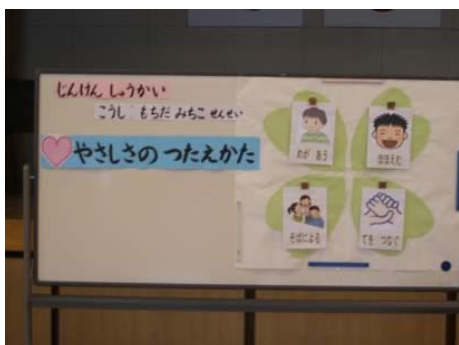
→学びの共同体としての意識を培うことであり、授業UDが有効に機能するための前提となります。

2 人権集会

個人差への配慮が自然なこととして周りの児童生徒に受け入れられることは大切です。このような様々な個人差について理解を深める機会をつくることも必要です。

例えば、「人権集会」を企画し、「いろいろな人がいる」ことや「友だちとの関わり方」について学んだり、友だちの良さも見つけたりすることもできます。

また、様々な苦手さを抱え悩む児童生徒にとって、友だちからの理解によって自分自身を肯定的に受けとめ、自信を持った前向きな生活へとつながります。



自分や友だちの良いところをたくさん見つけることは大切です。見つけられたときにはすぐに「すごいね」「えらいね」など温かな言葉がけが必要です。

図 12-2 「人権集会」

3 学級通信

学級の担任は、日頃から自分の学級経営方針や考えを家庭に伝え理解を得ることが大切です。

家庭への伝達手段の中で、学級担任がその都度タイムリーに全家庭に向けて発信できるものが学級通信です。様々な課題を持ちながらもそういった児童生徒の良さや頑張りを意図的に伝えることで、保護者の学校や教師への理解が深まります。

あなたの周りにはたくさんの方のことを気づかせてくれる素敵な友だちがたくさんいます。みんな同じ場所にいる、同じものを見て、同じ学級通信を読んでいます。

環境は、どの子にも平等に与えられているものです。ただ、そこから大切なことを気づける人もいれば気づけても自分自身に生かせない人もいます。同じものを見て感じ方が違う人もいます。それでいいんです。

友だちの色々な気づきや考え方、感じ方に触れて「へえ～、友だちってそんな風感じていたんだ。私はそんな風には思わなかったな。」「そっか、そういう考え方もできるな。」そうやって、たくさんの方の多様な考えや気づきに触れながら、次に何かしら事柄にぶつかった時に、それまでの自分の考えと少し違う考えや気づきを持って、そのことに立ち向かっていければそれで・・・。

そうやって「人間の幅」って広がっていくものなのではないかな？と思います。その幅の広げ方も、スピードも、やっぱり人それぞれでいいんじゃないかな・・・。

図 12-3 小学校 6 年生の学級通信から

1 お互いのがんばりを認め合う

学級内のみならず、モラルの形成には経験を重ねることで深まることが多く、学校生活においては、クラス単位、学年単位、学部単位で行事を設定し、コミュニケーションを図ることが周囲を理解し、モラルの形成、醸成を深める契機となります。

写真は、中学部3年生・図工の発表会の様子です。事あるごとに発表会の機会を設け、コミュニケーションの場としています。顕著に集団が変化する取り組みではありませんが、こうした地道な交流が、モラルの形成につながっていきます。



図 12-4 発表会でお互いの頑張りを称えあう

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

日頃の生活の中で、苦手さを自覚していたり、そのことを悩んでいた、そのことが原因で周囲と壁ができてしまったりする児童生徒がいます。

個別の課題に応じたプリントなどを用意しても、周囲の児童生徒と同じプリントでないことがわかるとプリントの交換を要求したり意欲をなくしたりすることがあります。また、1人有的时候には素直に話を聞けるのに大勢の中で個別に話をするを拒絶するような態度をとることもあります。

本人に対しての支援が集団の中であからさまであったり、周囲への指導が押しつけになっていたりすると、本人に対しての周囲の関わり方が遠慮気味になって良好な関係が築きづらくなります。本人もそのような雰囲気は敏感に察するものです。